

《原始仏教》について

1.

人間がコトバを用いることの意義は、どれほど高く評価しても、しすぎることはない。現在にわかに流行現象を呈している「記号」をもこのコトバにふくめるならば、人間世界はすべてコトバで満ち溢れており、さらには人間世界はコトバ世界とさえいい得る。

コトバを用いるはたらきは、モノ・コトに名称を付すことに直結する。いうまでもなくモノ・コトは本来は無名であるけれども、無名のままにとどまるならば、人間世界に登場するモノ・コトとはなり得ないと極言しても

三 枝 充 恵

よいであろう。いかなるモノも、いかなるコトも、名称を担って（人間によって名称が付されて）はじめて、人間世界におけるモノ・コトとなる。換言すれば、人間世界すなわちコトバ世界すなわち名称世界という、ひとつの等式が成立する。（音楽・絵画・彫刻・工芸などの芸術、さらにひたすら黙々と身体ないしその一部を動かす人間の行動のなかには、上の等式からは例外に属するモノ・コトがあり、それらはここには省く）。

《原始仏教》というのもひとつの名称であり、釈尊も仏弟子もふくめて当時の仏教者たちがこのような呼称を名のった形跡はまったくない。しかしながら私たちの世界

(仏教研究—仏教学を取りまく世界)では、とくに現在までのわが国では、この〈原始仏教〉の名称を用いて、或る特定のモノ・コトを指示し、それにより仏教研究—仏教学の世界に取り入れて、研究—学の対象とする。そしてそれがひろく一般にも受容されている。

このようないわば判り切ったプロローグを敢えて記したのは(実はさらに延々たる饒舌も下書にはあつたものの、以上で打ち切る)、この〈原始仏教〉という名称に對する私自身のすでに十余年来の疑義を、いたずらにいつまでも徹底に秘めておくことはやめて、ともかくもいったん公けに開陳し、そのような卑見に對する忌憚のない批判なり反論なりをこのさい多くのひとびとから受けたい、という私のひそかな願望にもとづく。

ただひとつあくまでも気がかりなのは、いつか果たしたいと希いながら、いまだなお果たし得ないままに過ぎているテーマ、すなわち、この〈原始仏教〉という名称を、いつ、誰が、何という論文ないし書物において、最初にあたえ用いたのか、一言であらわせば、この語の初出を、現在もなお確認することができないでいる。(お

そらく明治二十年ごろを中心とする學術雜誌の類を渉獵し踏査することによって、それが或る程度までつきとめ得るであろうと憶測しているとはいへ、それらを限なく詳しく検討する余裕のないまま今日にいたっている)。もしもそれについての知見をもたれるかたがおられたならば、ぜひとも御教示いただきたいと心から希う。

やむを得ず、すでにかなり以前から、学界の長老や先輩にお会いするたびに、右の問いを呈してきた。多分、高楠順次郎博士であろう、というのが大よその目標とされるらしい、そんな見当をつけているので、それがあはひとつのヒントになるのかもしれない。

しかしそれではまだ右のテーマの正解にはなっていない。仮にその高楠博士によって〈原始仏教〉の命名がなされたとなると、おそらくそれは博士の学ばれたイギリスもしくはドイツに、そのいわゆる原語があるのではないか、ということになり、それならば、仏教研究—仏教学そのものがわが国よりも少なくとも五十年以上も古いヨーロッパ各国の諸文献を検索しなければならず、そのために、近年の数回のドイツ旅行のたびごとに、大学や

州立の図書館などに一日ないし半日閉じこもって、ヨーロッパ各国語によるあまたの研究書のなかに、この〈原始仏教〉の原語(の初出)探しに明け暮れた。(ドイツ以外の地には遺憾ながら及んでいない)。

しかし上述したように、何の明白な資料も確証も入手できないで現在にいたり、この語の初出探究はなお徒勞のまま、何の成果も得ていない。その意味で、以下の叙述はいまだ定稿には到達せず、またその故に長年これを伏せておいた。

付言すれば、現在ドイツのインド学・仏教学に活躍中の友人たち、具体的には Bechert, Schmidhausen, Schlingloff, Hahn の諸君とは 'Urbuddhismus' また 'der primitive Buddhismus' という名称は決して用いないという一種の了解が、私とのあいだにほぼ固まっている。もちろんそのためには、この名称が何故に適切を欠いているかをめぐって、かなり突っこんだ長時間のディスカッションをこれまでおこなってきた。ただし残念なことに、英語圏およびフランス語圏には、それほど親しい友人も知人もなく、この了解はいまだに得られていない。

以上書き列ねてきたように、〈原始仏教〉〈Urbuddhismus〉〈primitive Buddhism〉〈Buddhisme primitif〉という四つを一括して、ただし煩わしいほど再説すれば、遺憾ながらその初出を掴み得ぬまま、おそらくこうであろうとの推定にもとづきつつ、その名称に對する(というよりは反撥する)私の疑義を記して行く。

以下の2と3とに主として資料的な論述をおこない、4以降にそれらを踏まえて拙論を展開したい。

2

〈仏教〉というの明らかなひとつの名称であり、この名称に関する卑見を、やはり未定稿ではあるけれども、最近の拙稿に記した⁽²⁾。ただしそれはインド・中国・日本の〈仏教〉の用例研究のみにとどまっていた、Buddhism, Buddhism, Bouddhisme などの西欧語に届かず、そのままであり、これら西欧語に関する詮索はいずれ何かの機会に試みたい。

ちなみに、たとえばカントの『自然地理学』(これが世界最初のアカデミックの少なくとも大学における地理

学講義であつたといわれる)には、まだ Buddhism の名称は見えない。同書では、「セイロン」に Budda (ブッダ)、「シヤム」に Sommona Cadam (サモナーカターム)、「シナ」に Fo (仏)、「日本」に Buzdo (Butsu), Budda, Buso の語が見え、それをめぐる Religion を記し説明を加えるとはいえ、正しい Buddha の語はなく、上述したように Buddhism の語も存在しない。

ともあれ、以下には〈仏教〉の語は拙稿の粗雑な記述でいちおう済ませて、そのまま踏襲する。そして私自身この語の使用に関して格別の異議を挿む意図もない。

あくまで問題は、〈原始仏教〉のその〈原始〉にかかわり、それにこだわる。そこで本稿はまず専ら〈原始〉を取り扱い、〈原始〉の語そのものをさまざまな角度から検討してのちに、〈原始仏教〉の名称を考える。

入手可能な諸種の漢字語原辞典の類書によって、これまで私の探索し得たところをつぎに述べる。

〈原〉は、現在の日本語のハラではない。ハラはもともと異字であり、〈原〉の後世の派生語からの転用による。〈原〉について見ると、その「」は厳であり、その下に泉

を書いたのが〈原〉の語原、「」の下に泉を三つ(上にひとつ、下に二つ)書いた例もある。すなわち、「」と泉との合字から〈原〉がつくられ、それは、涯下の岩石のあいだのまるい穴から水が湧く泉、地上にはじめて水の出るみなもとであり、その俗字が〈源〉。こうして、〈原〉はそこから水の流れ出るみなもとであり、それが転じて「本(もと)」の意となり、原本・原来(「本来」)また原因・原由(「由来」)や推原・遡原など、多くの用例がある。それから仮借して、高くて平らなところ「狩獵をおこなうところが原野であり、これからハラが生ずる。諸橋辞典⁽⁴⁾には、〈原〉について、①みなもと、②もと、③もとづく、もとづける、④たづねる、⑤ふたたびする、⑥のぞく(除)、⑦ゆるす、⑧はら、⑨耕作地、⑩つつしむ、すなほ、⑩虫の名(以下略)」があげられている。

〈始〉は、もと奴で、そのつくりの以ははじめは目「粗」とされ、もしくはつくりの台は、ムがすきの形、台は以と同じく人間がすきを手にし口で話す、いわば行為をおこす意をふくむとされる。これは白川静「字統」に詳しい。こうして、〈始〉は、女性の行為のはじまり、つま

りはじめて胎児をはらむこともいう。同じく諸橋辞典⁽⁶⁾には、〈始〉について、①はじめ、はじまり、②はじめるとはじまる、③はじめに、はじめて、④ついたち、⑤朝、⑥をさめる、をさまる(以下略)を掲げる。

以上の二字を合わせた〈原始〉については、諸橋辞典⁽⁶⁾は、①はじめをたづねる、根原を推し究はめる、②はじめ、おこり、元始、根原、③天然自然に成立したそのままたまなこと、元始をそれぞれの出典とともに記す。さらに〈原始権〉〈原始的〉〈原始簿〉〈原始時代〉〈原始宗教〉について付説し、そのうち〈原始宗教〉を〈発生したままで未だ進化した素樸な宗教〉と説明する。藤堂辞典⁽⁷⁾には、①物事のはじめ、根原をたづねる、根本を問いきわめる、②物事のいちばんはじめ、未発達・未開発である状態のこと、「原始林」「原始時代」とある。

ドイツ語の〈Urbuddhismus〉に移る。同じく〈Buddhismus〉は除く「」に「」のみ調べる。クルーゲの語原辞典は〈Er-〉について、それがアクセントのある前綴の説明を詳述したあと、その意味は、前置詞の「aus」(「...から」)と、「ursprünglich, anfang-

lich」とする。後者について見ると、Ursprung は原と同じく「水の流れ出る水原・起原・根本」であり、その形容詞の ursprünglich は「①起原の、最初の、本来の、②太古以来の、はじめのままの、純朴な、新鮮な」をいう。また Anfang は「最初、発端、始まり」、anfanglich はその形容詞。(なおこれから形容詞がそのまま副詞に用いられることは付言を要しない)。

最後に、英語の〈Primitive〉を検討する。以下はOED⁽¹⁰⁾にしたがうが、要点のみを記す。この語は、ラテン語の primitivus (= first or earliest of its kind) に由来し、その「」の〈A. adj. I. General senses〉のみを掲げると、①「Of or belonging to the first age, period, or stage; pertaining to early times; earliest, original; early, ancient」とあり、その初出を一五二六年として用例に「Primitive Church = the Christian Church in its earliest and (by implication) purest times」を記すところに興味がある(原始教会—原始キリスト教については後述する)。②「Having the quality or style of that which is early or ancient. Also, simple, rude, or rough

like that of early times; old fashioned. (With implication of either commendation or the reverse)》とあり、ここに見える「素朴、未発達、未開の」を意味するさいに、称賛かその反対(「輕蔑」)かのいずれを含蓄するところの注目される。この初出は一七五二年、一八二一年とやや新しい。そして「3. Original as opposed to derivative; primary as opposed to secondary; esp. said of that from which something else is derived; radical」といふ、この「何かが出てくるもと」の意は、上述の「原」や「Ursprung」と「水」という具体性はないものの、ほぼ同類と考えられる。なおこの初出は約一四〇〇年といふ最も古い⁽¹¹⁾。

以上のほぼ入門的な語義や語源などの探究によつて、「原始」ur-, primitive)に共通してゐることは、「へはこめ(最初)」、「もと」を第一に、続いて「素朴、未開」を内包しそれが片や称賛に通じ片やその反対の輕蔑に通ずると概括することができる。

また多くの推察を混じえざるを得ないけれども、おそらくいつごろからヨーロッパのどこかに誰かによつて

「primitive Buddhism, Urbuddhismus, Bouddhisme primitif」といふ語がつくられ、というよりは右のうちのどれかひとつがつくられ直ちに他の二語がつくられて、この三つの名称がならびおこなわれることがあり、それが「原始仏教」という日本語に翻訳され、しかも日本では専らこれが用いられて現在にいたつてゐるのではないか、これがいまの私の及び得る推測のいわば結論といえる。

しかしながら、上述したように、この英語・ドイツ語・フランス語の初出が不明であるのみならず、少なくともフランス語を除くと、その語(すなわち英語とドイツ語)の利用者や愛好者は現在の私には明確でない。

私の調査したごく一部を記すならば、いわゆる本格的な仏敎学の創始者ともいうべきリス・デヴィツ夫妻(Thomas William and Caloline Augusta Rhys Davids)にもこの語は用いておらず、オルデンベルク(Hermann Oldenberg)にも私の探したかぎりではこの語は見られない。リス・デヴィツ夫妻は一貫して「early Buddhism」であり、それに倣った否かに審かではないが、インド人の学者は私の調べたかぎり、すべてこの語を用いる。ま

たオルデンベルクは「Altbuddhismus, der alte Buddhismus」とする。ただしこの二人の^{オーストリア}学界活動は一八八〇年以降に顕著となるので、おそらくすでにそれ以前に、右の「primitive Buddhism, Urbuddhismus」の語があったのではないかと推定されるものの、その確認にはいたっていない。そしてもしもそのような推定が當を得ているとするならば、この両大巨匠によつてこの語が上述のような名称に変更されている点が、却つて注目に値することになるであらう。

なお、その後の英語・ドイツ語による仏敎研究書で「primitive Buddhism」を用ゐるのは、ホーナ女史(J.B. Honer, *Women under primitive Buddhism*, London 1930)であり、ただしこの書の^{ドイツ}「primitive Buddhism」の語の定義はなされてゐない。またドイツ語では、『人類の諸宗教』(*Die Religionen der Menschheit*, W. Kohlammer)がシュレーダー(C.M. Schröder)編により全三十六巻の予定で一九六一年より刊行され、その第十三巻として『インドの諸宗教 III 仏敎、ジャイナ敎、諸未開民族宗教』(*Die Religionen Indiens. III, Buddhismus*

mus, Jnismus, Primitivvölker)が一九六四年に公刊されたなかで、仏敎をフランスのバロー(André Bareau)が執筆しており、そこでは各章のタイトルに「Der Urbuddhismus, Der alte Buddhismus, Das Mahāyāna, Der Tāntismus」などとし、その文中にも(たとえば四ツヤージほか)それほど数は多くはないけれども「Urbuddhismus」の語があらわれる。ただしこれはRobert & Christa Scheerと二人のドイツ語訳であり、バローの書いたフランス語原文に何とあつたかを、この書物から知ることはできない。ただフランス語圏では、「Bouddhisme primitif」がなお一般的のようであり、たとえば名著の*L'Inde Classique*の第二巻に仏敎を論ずるやうに、一部の中国關係を除いて、全体をフィリオザ(Jean Filliozat)が執筆し、そのなかに(たとえば五一六―五二七ページ)には「bouddhisme primitif」の語が用ゐられてゐる(これについては先の(11)の註の後半を参照)。

いう名称は、更めていうまでもなく、この稿の冒頭にも記したごとく、或るモノ・コトに関して付されてあり、その名称の当否ないし適・不適を論ずるためには、当然のことながら、その名称を担わせられたモノ・コトそのものが明確に指定されなければならない。

そのモノ・コトは一部に例外は見られるけれどもほぼ世界的に大むね一致しており、その結論のみを示せば、つぎのとおり。(なお右の外国語を混じえたものを一括して以下は「原始仏教」として扱う。)

「原始仏教」とは、釈尊から仏教教団のいわゆる根本分裂までの仏教、ないしアショーカ王の時代までの仏教をさす。これは拙著『初期仏教の思想』(一三〇—一三四ページ)に、平川彰博士の論文からの引用、平川博士説、村元博士説を掲げて、わが国の諸学者のほぼ全体を網羅して列挙したところに明白であろう。外国とくにヨーロッパ(上述のバローもふくめて)やインドの諸学者も、右の指定にほとんど合致する。(実は本来は日本の諸学者が外国の諸学者に倣った例もある)。しかしながら、周知のように、仏滅年代したがって釈尊の年代に関して、外国

のまた日本の諸学者のあいだに約百年の差が開いているために、また根本分裂とアショーカ王との前後関係やその間隔の期間の推定の多少によって、右の指定には或る程度の変動が不可避となる。もしもどうしても世界的な統一見解を強行しようとするならば、右の指定の前半、すなわち、「原始仏教」とは釈尊から根本分裂までの仏教、とするのがおそらく最も妥当であろう。

「原始仏教」のほかに、よく知られているように、「根本仏教」という名称があり、これについて暫く述べる。この語は私の知るかぎり、外国には存在せず、わが国の姉崎正治博士が提唱し、宇井伯寿博士によって継承された。ただし両者のあいだには確たる懸絶がある。

姉崎博士は明治四十三年(一九一〇年)に『根本仏教』と題する書物を博文館より公刊されたが、その書名について、すなわち「根本仏教」の名称に関しては、その書のなかに定義も説明もいっさいない。全十篇より成り、大綱は「仏教の位置」「仏教思想の淵源」「仏教の発足点」に触れたあと、「転法輪、仏教の根本と仏陀の弘化」を述べ、「仏陀の人格」が最も詳しく、あと四諦の各々を

四篇に分ち説き、「僧伽、宗教的団結」に及ぶ。

同書の本文は、「仏教は宗教なり」の一文で始められ、「根本を二千数百年前の印度に養ひ、枝葉をアジア全大陸に繁茂せしこの大宗教の花実は何れの時に開き且つ結ばるべきや。根本仏教の概要を述べ来りて『源遠ければ流れ長し』の言を想起せずばあらず」と結んでいる。

序言に「聊か自ら待む所ありて茲に根本仏教を叙せんとするは、著者が仏教研究の上に於て従来なし来りしパーリ仏典と漢訳三蔵との比照に基き、而して宗教としての仏教につきて仏陀弘化の真面目に接せんと信念に出づ。この著述の由来につきてはこの外に多言するの要あらざるべし」ともあり、以上から推察すれば、「根本仏教」は上述の「原始仏教」とほぼ一致するものと見られる。

ただし文中には、「一乗道」「法華経方便品」「般若、空観の悟道」とくに「金剛経」「生天と浄土往生」とくに「浄土(教)」などにも関説する⁽¹²⁾。

なお私が古書店で入手した同書には、白紙(ただしずいぶん赤茶けている)のカヴァがあり、そこにはデーヴァナーガリー書体の活字で“mulabuddhachama”(マブ)

大書されており、おそらくこの複合語の末尾は dhama を意図してそのエが欠落したと推測される。それにして、この意味不明の語または“mulabuddhachama”の語について、説明も典拠も同書中には示されず、はたしてこのような(パーリ語ではなく)サンスクリット語が存在するか否かも不審を拭い切れず、あるいは姉崎博士の造語ではないか(そしてカヴァの文字はそれの誤記ではないか)とも考えられる。

宇井博士は「根本仏教」の名称に明確な定義を、たとえば大著『印度哲学史』(一九三二年)中につぎのように述べる。

茲に根本仏教といふは仏教の創唱者仏陀と其直接の諸弟子との有した仏教を指していふのである(同書、八二ページ)。

今茲に単に仏陀の学説とのみ称せずして根本仏教と呼び仏陀と其弟子とを含ましめむとするのは一には仏陀の思想学説は凡て直弟子を介して伝はりたるが為に仏陀のみを引離して知ることが殆ど不可能であることと二には直弟子の抱く考には仏陀に対する思

素が含まれて居つてこれは必ずしも仏陀に見出さるるものでなく而もそれが仏陀の思想學說と相待つて後世の仏教の發達の源泉となつて居ることとによるからである(同書、八六ページ)。

さらに同書では、この「根本仏教」にすぐ続いて、「原始仏教」が論ぜられ、その冒頭につきのように記す。

根本仏教以後から阿育王の即位頃に至るまで即ち紀元前三五〇—二七〇年を原始仏教の時代としますが、此時代は即ち仏陀の孫弟子以後に當るのである(同書、一〇五ページ)。

宮本正尊博士にも、比較的初期ないし中期の論文や著書に、「根本仏教」の用例が見られる。その著作目録によると、「根本仏教と弁証法」(『哲學雜誌』昭和七年)「仏教學の組織と根本仏教」(『宗教學紀要』二、昭和八年)があり、後者につきの一文がある。⁽¹³⁾

仏教の理論的統一の純粹性を表示するに最も適當なる語として「根本仏教」なる表現(傍点原著)

そして宮本博士のいわゆる大著三部作の第一の『根本中と空』(第一書房、昭和十八年—一九四三年)には、つぎ

のように記す(同書、傍点原著、一二—一三ページ)。

悲智、人法兩面の開會と云ふことは、實に仏教の中心的な問題である。……畢竟、それは自覺覺他、自成他の智である。サトリ即ち「覺証」の智である。

この自他・人法兩面を包括して示すべき方法或は精神こそ、中道 *majhima patipada*, *madhyama pratipad* であり、かくして見られる説を仏教と名けるならば、かかる方法の最も純粹にして且つ本質的なものを「根本中」と設定し、これに依つて考察せられる仏教を「根本仏教」と名けることが可能である。

これから明らかなように、宮本博士の説く「根本仏教」とは、判りやすくいえば「全仏教に一貫する最も純粹で本質的なものを」を提示し、いわば一種のイデオロギがなされている。

右の書名に採用され、また上述の引用にもあつた「根本中」について付言する。それは宮本博士の全生涯を通じて愛好されたが、一部の誤解を解くために、同書(四一—四二ページ)から一文を引いておく。

龍樹の中論は西蔵及び梵文の伝承に照合する時、こ

れを『根本中頌』 *Mūla-madhyamakā-kārikā* と名ける。

根本 *mūla* とはその註疏 *vyāhi* に対して根本原典を意味し、著書の形式的性質を示す語であるが、品類頌 *kārikā* は哲學や文法学にあつて、其の基本的な

教理或は基準の条則を示す名である。このことに注意するならば、根本頌 *mūla-kārikā* とは、「中に就いての根本原典」であると云ふ意味である。随つてその根本は根本頌と熟すべきであるが、根本中と連續せしめぬを以て至当とする。茲に於てか、予の提唱する「根本中」の根本は、根本頌のそれよりして抽出し來つたものでないことは、明らかである。

以上の姉崎・宇井・宮本の三博士のほかにも、「根本仏教」の名称はまれに見られるが、それらはこれらのい

ずれかにふくまれて特記するに及ばないと考えられるので、すべて省略する。

「原始仏教」の名称とその対象とを以上のように規定したうえで、その研究に必要な諸資料をつぎに網羅的に提示しよう。

第一はパーリ語による五つのニカーヤからなるいわゆるスッタ・ピタカ(經藏)であり、それにヴィナヤ・ピタカ(律藏)が加わる。いうまでもなく、アビダンマ・ピタカ(論藏)や以上全部のアッタカター(註釈書)の類

も重要資料として動員される。

第二は漢訳の四阿含であり、この四阿含に別訳や單經なども加えて、『大正新脩大藏經』の「阿含部」二巻にふくまれるものすべて。しかもそのほかに、たとえば同「本緣部」中の「義足經」や「法句經」關係テキストなど、同「經集部」中の「陰持入經」や「本事經」など。そして五種の「律」をふくむ同「律部」三巻(そのうちたとえば最後の漢訳ながら義淨訳の「根本説一切有部毘奈耶」もきわめて重要)その他がある。

第三にサンスクリット文獻およびブラークリット資料があり、右の第一と第二とのようにその全体は包括し得ないけれども、それぞれの單經については、近年すこぶる貴重な諸テキストが(その数は多いとも少ないともい

なおレヴィ (Sylvain Lévi) やリニーダース (Heinrich Lüders) やベッヒホルト (Heinz Becher) について中村元

博士と私との対談のなかで論じ、また平川彰博士がワダー (A. K. Warder) 説を引用しつつ強調されるように、釈尊とその入滅直後の第一結集とさらに相当期間の口伝とに使用されていたマガダ語に関して、格別の注意が必要とされる。ただし残念なことに全文がマガダ語からなるテキストも資料も現存していない。

第四にさらに部分的ではあるが、チベット訳や中央アジアの諸言語に移された資料があり、望み得るかぎりそれらの参照が要請されつつある。

第五に間接的ながら、近年とくにジャイナ教の古い諸テキストとの比較研究が強調され、またウパニシャッドおよびその流れを汲む諸思想や文学作品ならびに民間伝承など、そしてアショーク王碑文をはじめとする石刻文その他が動員されよう。

4

先の2の考察から、〈原始、ur, primitive〉が明らかと

なり、〈原始仏教〉 (Urbuddhismus, primitive Buddhism) (以下これらを〈原始仏教〉に統括する) も推定を混じえつつもその大要が知られる。

すなわち〈原始仏教〉の語はつぎの二つを指示する。

a 〈はじめ (最初)、もと〉の仏教

b 〈素朴、未開〉の仏教 (ときに称賛ときに軽蔑)

そこでここには、この二つを右の3に示した対象 (モノ・コト) およびその諸資料に対応させる論述を試みる。(いわば本稿の主文をなす)。まずbについてこの4に論じ、そのあと5にaについて考察する。

〈原始仏教〉を〈素朴であり未開 (未発達) の仏教〉とするさい、() 内に加えたように、称賛か軽蔑かのいずれかを必ず含意する。

そのうち、軽蔑をこめて〈原始仏教〉をあからさまに名ざす研究も研究者も、現在は皆無であり、それに触れる必要すらない、といつてよい。

しかしながら、たとえば現在私たちのあいだに流通している日本語 (英語やドイツ語も同じ) の用例では、〈原始〉の語にこの種 (軽蔑) の色彩がかなり濃く、日本人

(英語圏やドイツ語圏のひとつ) 一般の常識からすれば、

このような例は枚挙に遑がない。その一例として、最もポピュラーな『広辞苑 第三版』 (岩波書店、一九八三年)

では、〈原始 ① 始めをたずねること、② はじめ、おこり、③ 自然のまま、進化または変化しないこと、原生〉とあり、その派生語を見ると、〈原始的 ① 文明がまだ開けていないさま、また幼稚なさま、③ もとの姿、初めの段階であるさま。本源的〉、〈原始時代 文化の未だ開けない野蛮な時代〉、〈原始社会 階級と文明との成立する以前の、人類の歴史の第一の段階ともいうべき社会。また、現在の最も未開な種族の営む社会。組織が単純で、個人の意識は集団の意識に包摂されて独立せず、宗教および呪術が強大な役割をもつ。未開社会〉などが目だつ (この例は右の外国語においても同じ)。

かつてのいわゆる天台の「五時教判」において、その第二の鹿苑時の十二年間に、「釈尊はとくに意識的に卑俗化して、素質なく智慧もないひとびとに具体的に判りやすく阿含経を説いた」(趣意) とされた伝統は、中国や日本に長く尾を引いて現在にいたり、上述したように、

このような迷妄は専門家のなかでは完全に払拭されたとはいえ、なお一般に、もしくは却って一知半解の徒に残存していることがあって、ときに一驚する。

このような状況のもとに、右の〈原始〉 (その派生語をふくむ) の語の日常的な卑俗化された用例をも考慮するとき、仏教そのものに對する純粹で真摯な研究者が、なぜ敢えて〈原始仏教〉の語を用いるのか、またなぜこのような呼称にあくまで固執するのか、その理由を私は納得しがたい。(おそらくそのためであつてか、上述の『広辞苑』では、〈原始〉の派生語にとくに〈原始仏教 釈尊在世時代から各部派に分裂するまでの仏教〉という、やや他の派生語にはなじまない一項を添える)。

つぎに、称賛をこめて〈原始〉の語を用い〈原始仏教〉と呼ぶならば、それはたしかに或る面で大いに歓迎されよう。そして少なくとも現在の仏教研究者 (おそらく仏教徒の大半) の用法は、まさしくそのとおりなのであるう。

しかしながら、ここに控えるアポリアは、その〈素朴〉を謳うとすれば、上述の諸資料のうちからひたすら〈素

朴」なるもののみを抽出してきて、それを「原始仏教」と名づけるのでなければならぬこととなる。そしてさらに、それならば、釈尊のさとりの内容も説法のすべても、いわんや「原始仏教」そのものが、それほど実際に素朴であったのか、ということにまで、結局は発展せざるを得ないのである。

たとえば「苦」(dukkha, dukkha)という語ないしテーマひとつを取ってみても、それをたんなる肉体的・生理的苦痛(いわゆる英語の pain)の語に置きかえるならば、たしかに「素朴」であろうけれども、それを「不如意(思うとおりにならない)」と解し「suffering」と翻するさいには、それはあまりにも多くの含意を有しつつ、さらに種々なる解釈の展開が考察され得て、決して「素朴」どころではない(このような例は多数あるが、ここには省く)。

そもそも「素朴なる原始仏教」が以後の仏教(思想)史へとその歩を刻んで行くさいに、しかも後代の多くの偉大な仏教者がほぼ一致して釈尊そのものないし「原始仏教」への直結もしくは還帰を謳い、それはインド仏教史のみならず、全仏教史を貫いて動かない。そのなかに

は、明らかに「素朴なままの仏教」の実践が見られる一方、きわめて高度且つ深淵な思想をはらみ育て樹立する仏教(者)もある。たとえ本来は純粹に称賛の意図をもって「原始仏教」の命名をなし、そのような扱いをどこまでも貫こうとする場合、これら仏教史全体から逆にそのような「素朴なる原始仏教」を回顧するときに、その称賛の的そのものが行方不明となり、さらに逆効果を生ずることがないであろうか。

結論として、称賛と軽蔑という相克する二重の「素朴」という意を介しての「原始」の語を用いつつ「原始仏教」とするのは、右の叙述に明白なように、まことにアンビヴァレントな情況ないしはディレンマに陥る(もしは陥りかねない)危険が指摘され得よう。

5

ここには、「原始仏教」IIはじめ(最初)、「もと」の仏教(以下に「最初の仏教」と統括して論ずる)を考究する。

「最初の仏教」とは、すでに述べた宇井博士の「根本仏教」に近く、それを弁別しつつさらに同博士の「原始仏

教」をも加えて、その内容を最も鮮明にした大冊が、中村元博士の『原始仏教』五巻(「中村元選集」11・15)として公刊され、私たちは最大の恩恵を受けている(世界のどこにもこれほど完成された研究書は存在しない)。

中村博士のこの研究はまことに慎重を極め、まず諸資料の取り扱いをめぐる方法論から出発して、フランケ(Rudolf Otto Franke)以来とくにリューダースと宇井博士とによって地歩が固められた諸点を更めて確認したうえで、オリジナルの数々の自説が詳細に加えられる。それは、先にあげた諸資料から「最初の仏教」を探り当てまたは掘りおこすために、あらゆる知識が動員される。

その前提もプロセスも結論もすべて右の大冊中にきわめて明確に示されており、専門家はすでに知悉していると思われるので、ここにはすべて略す。

それでもなお、それに対しての批判や反論が絶無とはいえず、(卑見は拙著『初期仏教の思想』中に記した)、たとえそのような批判や反論を論文なり著書なりに公表しないまでも、私自身ときにそれを耳にし、あるいはその片鱗が目にとまる。

一言に要約するならば、先に掲げた膨大な資料が現在に伝わるなかで、それらから「最初の仏教」である「原始仏教」を純粹に学問的に確認することは、現状のところ、非常に困難であるのみならず、むしろ不可能といってもよく、おそらく宇井博士の明言されるように、「推論の上に出す外には、方法のないものであると言へると思われ⁽¹⁷⁾」のではないか。そのような研究は、一方でどこまでも追究しようとする学的関心を惹きつけて離さないけれども、同時に他方で、それが純粹なる学として成立し得るか否かの疑念をつねに蔵している。

「最初の仏教」を「原始仏教」と命名することに反発する私の最大の批判・批難は、この「原始仏教」の名称が冒頭の1に記したようにまずヨーロッパにあり、それが潜在して流れているのではないか、しかもそのヨーロッパにおける「原始仏教」の命名は、かれらに馴染深い「原始キリスト教」という名称からの安易なアナロジーに由来するのではないか、という点において極まる。

「原始キリスト教」(Urchristentum)「primitive Chris-

tiinity) (上述の primitive Church をみよ) という語の初出も、この語の指定の由来も、充分に確証し得ないまま、右のような不審・不満を称えることに、みずから多大の弱点のあることは、充分に反省し自覚しているといえ、それでもなお私の知るかぎり、すでに〈原始キリスト教〉(および右の英語・ドイツ語)の語そのものは、明瞭な学術用語であり、確たる市民権を保持していて、それについては(学術的なものはもとより)すべての書物に、そして各種の辞典に明記されている。

ここにキリスト教史(その最初期)を述べる要はないであろうが、ごく概略だけを辿るならば、イエスの十字架上の死後、その復活を信じ、イエスをキリスト(救世主)と奉ずる使徒たちにより、イエスの宣教を反芻しつつ或る固定を得た時点において、キリスト教が成立し(したがって極言すればイエス自身はキリスト教を知らなかった、ないしイエスはキリスト教徒ではなかった⁽¹⁸⁾)、やがてこのいわゆるエルサレム教会を中心とするキリスト教活動が開始されて、福音書の一部がつくられ、また伝道もなされる、一方、イエスよりやや年長のパウロの回心

があつて、かれのめざましい活躍によりいわゆる異邦人教会のキリスト教活動があり、ここにはパウロの書簡が各地に送られている、その後いわゆる使徒後時代になお右の二つの教会とローマ帝国との交渉がなされる、このような〈原始キリスト教〉について、たとえばつぎの記述が最も判りやすい、「原始キリスト教とは、イエスの死後、ユダヤの首都エルサレムにおける最初の教会の成立から、一世紀の終り頃までの初期七〇年間のキリスト教を指すのが普通である。この間に、イエスの弟子たちによって伝えられた福音が、ユダヤの地域を越えて、ギリシア・ローマの世界に広まりゆき、各地に教会が建てられ、多くの信徒ができて、キリスト教が大きな勢力となったのである。」⁽¹⁹⁾

この〈原始キリスト教〉の時代に現在の「新約聖書」の大半ないし全部が文書の形で成立する。おそらく最古のものが「パウロの書簡」紀元五〇年代、ついで「マルコによる福音書」六〇〜七〇年代、あと「マタイによる福音書」「ルカによる福音書」七〇〜八〇年代とされ、これまでを見ても、イエスの死(およそ紀元三〇年代)後

およそ二〇〜五〇年の間に、〈原始キリスト教〉はパピルスその他に書かれた資料を成立させている⁽²⁰⁾。

それに比較するならば、上述の〈原始仏教〉の資料は、口伝の時代がおよそ数百年にも及び、しかも資料自身が増広なり削除なりをふくむ改変を認めていることが明らかにされており、さらに現在に伝わる資料の固定は、その〈原始仏教〉の時代ではなくて、つぎの時代に部派仏教の内部(それらは複数―多数)においてようやく達成される⁽²¹⁾。

〈原始仏教〉について

このようなとくに資料的見地にもとづくとき、おそらく〈原始キリスト教〉とのアナロジイから安易に〈原始仏教〉と命名してしまった西欧の先人(たち)は、そのあまりにも短絡的な態度が厳しく追及されなければならぬであろう。推察するところ、当時の地には仏教に関する知識はきわめて乏しく、研究も研究資料もほとんど知られず、いわんや仏教史そのものがいまだ形成されず、きわめて漠たる輪郭がかなり無責任に推測された段階において、右の「西欧の先人(たち)」は、かれ(ら)の通曉するキリスト教史に当てはめて、その〈原始キリ

スト教〉の或る程度確固たる指定をそのままに、〈原始仏教〉の語をつくりあげたのではないか。

〈原始キリスト教〉の約七十年間に比して、〈原始仏教〉の時代は倍以上に長く、資料の点では口伝の年代が前者のほぼ十倍ないしそれ以上にも及んで、当然のことながら、その間の世代交替をはじめ口伝の不確定要素はおよそ想像以上に著しい。こうしたあとに残されて現在に伝わる〈原始仏教〉の資料のうち、はたして幾許のものを〈原始仏教〉そのものに還元可能であろうかが問われているなかで、どうしてそのような〈原始仏教〉の名称に固執しなければならぬのであろうか。

6

以上ときにはいささか激しい口調をもって〈原始仏教〉の名称への疑義を提示した。

もとよりすでに〈原始仏教〉の語は(英語圏・ドイツ語圏ではすでに消滅しかけていても)わが国には定着しており(上述したように『広辞苑』にも登場する)、いまさら変更するとなれば、いたずらに混乱を招くおそれ

があるという指摘もある。しかしそのような「原始仏教」の名称の愛好者も、もしも英語で標題を付したは論文や著書を執筆するさいは、ごく少数の例外を除いて、それを「early Buddhism」とする。それならば、その「early Buddhism」を、または「der frühe (od. frühere) Buddhismus」なら「der ältere (od. alte) Buddhismus」を、そのまま日本語にして「初期仏教」としては、どうであろうか。⁽²²⁾

その場合に、この「初期仏教」という名称に対して、「初期」という以上は、「中期」と「後期」とが付随しなければならず、それについて、私はすでに拙著『ヴァスバンドウ』(講談社、一九八三年)の「はじめに」(とくにその「一 インド仏教史の概括」)に述べたけれども、その詳細はなるべく近い別の機会に闡明したい。

註

(1) 記号学からすれば、「記号」を「*Zeichen*」ではなく、記号(これが種々に分けられる)に「*Symbol*」がふくまれる。また記号学の歴史は古く、ギリシアのヒポクラ

テスを端緒として、中世に多くの記号論があり、近年はジョン・ロック(John Locke, 1632-1704)が関心をもち、そして近代においてアメリカのペース(C. S. Peirce, 1839-1914)とスイスのソシニール(F. de Saussure, 1857-1913)とにより記号学が創設されたという。記号学に関する文献は欧文・和文に数多くあるが、最新刊の川本茂雄『「*Zeichen*」と「*Symbol*」——記号学への旅立ち——』(岩波新書、一九八六年)が最も簡便であろう。

(2) 拙稿「仏教・仏教学・仏教評論」(『理想』六三三号、一九八六年二月・三月合併号、六七〜六九ページ)。

(3) 原著を参照する煩雑を省くために、拙訳「カント全集・第十五巻」(理想社、一九六六年)の三五一、三五三、三六八、三七七〜三七八ページ参照。

(4) 諸橋徹次『大漢和辞典』第二卷六五三ページ。

(5) 同、第三卷六六一ページ。

(6) 同、第二卷六五五ページ。

(7) 藤堂明保『学研 漢和大辞典』一九〇ページ。

(8) 右の二種のほか、文中に記した白川静『字統』、加藤常賢『漢字の起原』、藤堂『漢字語源辞典』を、また日本語の「げんし」について小学館『日本国語大辞典』を参照した。『広辞苑』については後述する。

(9) Kluge, *Etymologisches Wörterbuch*, Walter de Gruyter & Co., 18. Aufl., Berlin 1960, S. 809.

(10) *Oxford English Dictionary* 1970 に于て。

(11) なお英語と親近関係にあるドイツ語の「*primitiv*」は、最もポピュラーな Wahrig の辞典に「*ursprünglich*」のほか「*einfach*」(単純な)、「*dürrig*」(貧弱な)、「*unvollkommen*」(未完成の)、「*geistig wenig entwickelt*」(精神的発展の乏しい)をあげる。

なおこれまでのまたこのあとの検討にフランス語の「*primitif, ive*」を省いたのは、私自身のフランス語への習熟が充分でなく、そのいわば語感(Wortgefühl)を欠くことによる。最新刊の白水社『仏和大辞典』を参照すると、この語の意味は英語やドイツ語のそれらとそれほどの違いはなく、とくにそれが「話し言葉」としては「単純な、素朴な、粗野な、簡単な、簡素な」の用例が見られるものの、全体の範例からすれば、このフランス語には英語やドイツ語に顕著な一種の軽蔑をふくむ用例は少ないように見うけられる。

(12) このいわゆる大乗仏教への関説を受けて、たとえば水野弘元博士は、姉崎博士説をいわゆる「大乗非仏説」に対する村上專精・前田慧雲両博士説以後の新しい仏説論と見なしておられる。水野『経典 その成立と展開』校成出版社、一九八〇年、四八〜四九ページ。

(13) この論文を再録した新刊の『宮本正尊博士仏教学論集 仏教学の根本問題』春秋社、一九八五年、三九ページ。

(14) たとえば桜部建「初期仏教研究の回顧」(『仏教学セミナー』第四二号、一九八五年十月、一〇〇〜一〇一ページ)

ジ)にはつぎの文が見える。「宮本正尊博士は「根本仏教」という言葉を……釈迦牟尼から始まってやがて大乗仏教、そして中国日本にまで及ぶ全仏教の括りの中に、一貫して流れている、基本的な、仏教の「ものの考え方」——そういうものをこそ、根本仏教と呼ぶべきではないかという考えであります。そういう考えを宮本先生にサジェストしたのは、『根本中論偈』という龍樹の述作の表題であつたらしいのです。『根本中と空』という著作もあります(以下略)。

(15) 『仏教の思想——三枝充恵対談集』春秋社、一九八六年、一六五〜一六七ページ参照。

(16) 平川彰「縁起思想の源流」(『平川彰博士古稀記念論集 仏教思想の諸問題』春秋社、一九八五年、三七〜七四ページ)。

(17) この語は「根本仏教」に関して述べられている(宇井『仏教思想研究』岩波書店、一九四三年、五〇ページ)が、「原始仏教」にまで拡大され得よう。

(18) このあたりの事情については拙稿「仏教学とキリスト教学」(拙著『仏教と西洋思想』春秋社、一九八三年)に詳述した。

(19) 『キリスト教大事典』教文館、一九六三年、三九一ページ。このあとにこれに対する諸疑義をふくんだ諸解釈が示されるが、それらに關しては、キリスト教に關して最も權威ある書といわれる RGG (Die Religionen in Geschichte und Gegenwart) 3. Aufl. のなかの「Ur-

christentum”の項を参照。付言すると、全六巻という浩瀚なこの大辞典に“Urbuddhismus”の項はなく、“Buddhismus”に代つてはその「宗教史」(Religionsgeschichte)をヘルテル(Herbert Hartel)が約一〇ページにわたり論ずる。しかもその文中には“Urbuddhismus”の語はまったく見えない。

(20) ただしイエスの語ったアラム語(ヘブライ語の俗語)はすべてギリシア語に置きかえられた。この両者は、前者はセム語族、後者は印欧語族に属して、その懸隔は甚だしい。

(21) 本文中に触れたマガダ語は、パリー語とともにサンスクリット語の俗語であり、また漢訳経典の原典はごく少数の例外を除きサンスクリット語と推定されて、その見地からいえば、言語学的な変動は(少なくとも)「原始キリスト教」に比較すれば、それほど大きくはない。

(22) 「初期仏教」を冠した書物に、早島鏡正『初期仏教と社会生活』(岩波書店、一九七四年)がある。しかし同書中に「初期仏教」の定義は見えず、その語も「索引」によれば二回登場するだけで特殊の意義づけはない。それどころか、編・章・節のタイトルをはじめ、文中の用語もすべて「原始仏教」で終始している。それに対して、塚本啓祥『初期仏教教団史の研究』(山喜房、一九六六年、改訂増補一九八〇年)は、頻度は少ないもののつねに「初期仏教」の語を用い、「原始仏教」の語は見えない。

いようである。ただし「初期仏教」の語に関する但し書はなく、またこの書の英訳は *A History of the Early Buddhist Order* (early Buddhism) からの「初期仏教」とは定めがたい。拙著「初期仏教の思想」(東洋哲学研究所、一九七八年)では、「はしがき」の冒頭に「初期仏教」の語を用いた理由を記したが、消極的なものが多く、また充分とは到底いえない。ただし同書(その冒頭論文は一九七三年刊)ではことごとく「初期仏教」の語をもって論述した。そして同書執筆のさなかに、「原始仏教」の名称への疑義が強化されて、本稿冒頭に記したように十余年間そのための資料を折に触れて蒐集し、友人や知人などと論じあって、ようやく本稿となった。

また、論文の標題に「初期仏教」という語が最近少しずつ見え始めているとはいえ、なお少数に属する。それらのうち、右の註(14)に引用した桜部建「初期仏教研究の回顧」ではつぎのように「初期仏教」の語の内容がさらに拡大する、「初期仏教」ということは勿論、阿含の仏教、それから阿毘達磨の仏教を含むのですけれど、それに初期の大乗仏教をも含めて、その全体を注意しなければいけない」(同、九七ページ)。これに対する私見は、本稿末尾に示した機会に述べたい。

(さいぐさ みつよし・筑波大学教授)